

日本語 医学

クラス用教課書

理論基礎

中醫

韩 晶 岩 編 著
遼寧教育出版社

中 医 基 礎 理 論

韩晶岩 編著

冯景双 監修

李德新

遼寧教育出版社

一九八七年·瀋陽

中 医 基 礎 理 論

韩晶岩 編著

遼寧教育出版社出版 遼寧省新华書店發行
(瀋陽市南京街6段1里2号) 大連外國語學院印刷廠印刷

字數: 222.000 開本: 787×1092 1/32印張: 10 1/4

印數: 1—5,500

1987年4月第1版 1987年4月第一次印刷

責任編輯: 王一心 責任校對: 禾 全

封面設計: 安今生

統一書號: 14371.1 定價: 3.00元

序 文

中国の医薬学は悠久なる歴史を有し、我が国の人民が、長期にわたって、疾病との闘争の経験をまとめあげたもので、我が国のすぐれた文化遺産の重要な組成部分である。長期の医療実践を通じて、しだいに独特な医学理論体系を形成して、中国人民の保健と中華民族の繁栄と隆盛に対して、偉大な貢献をつくした。建国以来、党の衛生工作方針と中医政策の下で、中医中薬学は、飛躍的な発展を獲得した。中医師の後継者を育成するために、全国の各省市は、前後して中医学学院を創設し、貴重な祖国の医薬学遺産を継承し発展させることができるようにした。

遼寧中医学学院が創設されてから、もう30年の歳月をすぎた。現今、三つの学部を設けて、その中、針灸学部は日本語で講義している。本書は韓晶岩君が、日本語で編著した針灸学部用のさきがけの教科書である。日本語で、体系化された中医学教科書を著わすことは、国内においては、その先例を見られない。

本書は、中医学の基本的な理論を系統的に、明快に述べ、その上、日本語も流暢で、まことに、すぐれた教科書としての内容をそなえているから、医学生・教師・中医師及び中医学を学ぼうとする方に推薦したい。

遼寧中医学学院 教授 宋培藻

1986年冬

まえがき

1. 本書は中医学院及び西洋医学院の日本語クラスの中医基礎カリキュラムの教学の需要に応じて編集したものである。

2. 本書は現在の講義要綱に基づき、中医基礎理論の主な内容たる陰陽五行学説・藏象学説・気血津液学説・経絡学説・病因病機学説・予防と治療の原則などについて割合に詳しく論述したのである。

3. 学習の便宜を図るため、大部分の古典医籍の原文をそれに相応する章と節の後に附記しておいた。

4. 本書の使用する中医学の用語はいずれも《中医漢方医語辞典》と《漢方用語大辞典》に基づく。

5. 本書は遼寧中医学院の教務処でその初版を印刷し、そしてこの学院の最初の日本語クラスのために講義したことがある。

6. 本書の執筆に当って第五版《中医基礎理論》・日本国神戸中医研究会の翻訳された《中医学基礎》及び趙有臣先生の翻訳された《中医臨床大系・臨床理論概要》などの本を参考とし、なお日本語に造詣の深い馮景双先生と中医学に経験の深い李徳新先生より色々御助言を蒙り、脱稿の後、更に日本東洋医学会の武内と磯村両博士が本書の為幾多の教益を賜り、ここに附記して衷心よりの謝意を表する。

1986年8月

目 次

緒 論

一、中医基礎理論の研究対象、内容及びその位置	
について	1
(一) 中医基礎理論の研究対象	1
(二) 中医基礎理論の基本内容	3
(三) 中医基礎理論は中医学での位置	5
二、中医基礎理論の形成	5
(一) 中医基礎理論という学科の形成	5
(二) 中医基礎理論の基本的な内容の形成	6
三、中医基礎理論の基本的な特徴	8
(一) 整体概念	8
(二) 弁証論治	10
〔古典の参考文献〕	14

第一章 陰陽五行学説

第一節 陰陽学説	15
一、陰陽学説の基本内容	16
(一) 陰陽について	16
(二) 陰陽の相互関係	19
二、陰陽学説の中医学に於ける応用	24
(一) 人体の組織構造の解釈	24
(二) 人体の生理機能の解釈	25
(三) 人体の病理変化の解釈	27
(四) 疾病の診断の総綱	29

(五) 治法と投薬の根拠	30
第二節 五行学説	31
一、五行学説の基本内容	32
(一) 五行の特性とその帰類	32
(二) 五行の相互関係	34
二、五行学説が中医学においての具体的な応用	38
(一) 五行の特性に根拠をおいて臓腑の生理的特徴の解釈	38
(二) 五行の生克から臓腑の間の生理機能の内在関連の 解釈	40
(三) 臓腑の間の病理影響の解釈	41
(四) 診断に用いる	42
(五) 治療原則を定める	42
〔古典の参考文献〕	47

第二章 藏 象

一、藏象学説の概念と内容	50
(一) 藏象学説	50
(二) 藏象学説の研究内容	50
二、藏象学説の形成	52
(一) 古代の解剖学の基礎	52
(二) 人体の生理と病理との現象を観察することについて	52
(三) 長い間に渡っての治療経験の概括	53
三、藏象学説の特徴	53
第一節 五 臓	55
一、心	55
(一) 心の生理機能	56
(二) 他の器官との関係	58
〔附：心包絡〕	58
二、肺	59

(一) 肺の生理機能	59
(二) 他の組織器官との関係	63
三、脾	65
(一) 脾の生理機能	66
(二) 脾の生理特性	68
(三) 他の組織器官との関係	70
四、肝	71
(一) 肝の生理機能	71
(二) 他の組織器官との関係	75
五、腎	76
(一) 腎の生理機能	77
(二) 他の組織器官との関係	83
〔附：命門〕	85
〔古典の参考文献〕	86
第二節 六 腑	93
一、胆	94
二、胃	95
三、小 腸	96
四、大 腸	97
五、膀 胱	98
六、三 焦	99
(一) 三焦の生理機能	99
(二) 三焦のそれぞれの機能特徴	100
第三節 奇恒の腑	101
一、脳	101
二、髓	103
三、骨	104
四、女子胞	104

(一)「天癸」の作用	104
(二)衝、任二脈の作用	104
(三)心・肝・脾の作用	105
〔附：精室〕	106
第四節 臟腑の間の関係	106
一、臟と臟との間の関係	106
(一)心と肺との間の関係	107
(二)心と脾との間の関係	108
(三)心と肝との間の関係	108
(四)心と腎との間の関係	109
(五)脾と肺との間の関係	110
(六)肝と肺との間の関係	111
(七)腎と肺との間の関係	111
(八)肝と脾との間の関係	112
(九)脾と腎との間の関係	113
(十)肝と腎との間の関係	113
二、腑と腑との間の関係	114
三、臟と腑との間の関係	115
(一)心と小腸との間の関係	115
(二)肺と大腸との間の関係	115
(三)脾と胃との間の関係	116
(四)肝と胆との間の関係	117
(五)腎と膀胱との間の関係	118
〔古典の参考文献〕	118

第三章 氣血津液

第一節 氣	122
一、氣の概念	122
二、氣の生成	123
(一)氣の来源	123

(二) 気の生成に係わる臓腑	124
(三) 気の生成する過程	124
三、気の機能	125
(一) 推し動かす作用	125
(二) 温煦作用	126
(三) 防禦作用	126
(四) 固摂作用	126
(五) 気化作用	127
四、気の運動とその運動仕方	128
(一) 気の運動	128
(二) 気の運動仕方	129
五、気の分布と分類	131
(一) 元 気	132
(二) 宗 気	133
(三) 營 気	134
(四) 衛 気	135
第二節 血	137
一、血の概念	137
二、血の生成	138
(一) 水穀の精微から化生	138
(二) 精から化生	139
三、血の機能	140
四、血の循環	141
第三節 津 液	142
一、津液の概念	142
二、津液の生成と輸布と排泄	143
三、津液の機能	144
(一) 滋潤と濡養の作用	144

(二) 血液の補給	145
第四節 気血津液の間の相互関係	145
一、気と血の関係	146
(一) 気は血の帥なり	146
(二) 血は気の母なり	147
二、気と津液の関係	148
(一) 津液に対する気の果す役目	148
(二) 気に対する津液の果す役目	149
三、津液と血液の関係	150
〔古典の参考文献〕	151
第四章 経絡	
第一節 経絡の概念と経絡系統の組成	155
一、経絡の概念	155
二、経絡系統の組成	156
(一) 経脈	156
(二) 絡脈	157
(三) 联属部	157
第二節 十二経脈	158
一、十二経脈の名付とその四肢に分布のきまり	158
二、走向・連接・分布・表裏関係及び流注の 順序	159
(一) 走向と連接	159
(二) 分布と表裏関係	160
(三) 流注の順序	161
三、十二経脈	162
(一) 手の太陰肺経	163
(二) 手の陽明大腸経	164
(三) 足の陽明胃経	164

(四) 足の太陰脾經	166
(五) 手の少陰心經	167
(六) 手の太陽小腸經	168
(七) 足の太陽膀胱經	169
(八) 足の少陰腎經	170
(九) 手の厥陰心包經	171
(十) 手の少陽三焦經	172
(十一) 足の少陽胆經	173
(十二) 足の厥陰肝經	174
第三節 奇經八脈	175
一、督 脈	176
二、任 脈	177
三、衝 脈	178
四、帶 脈	179
五、陰蹻脈・陽蹻脈	180
六、陰維脈・陽維脈	181
第四節 經別・別絡・經筋・皮部	183
一、經 別	183
(一) 循行の線路	183
(二) 生理的機能	185
二、別 絡	187
(一) 生理的機能	187
(二) 別絡の分布	188
三、經 筋	190
(一) 生理的機能	191
(二) 分布の部分	191
四、皮 部	194
第五節 經絡の生理及び經絡學說の臨床應用	196

一、経絡の生理	196
(一) 表裏上下を交流し、臓腑器官を連係する	196
(二) 気血を運行し、臓腑組織を濡養する	198
(三) 感応伝導の作用	198
(四) 機能のバランスを調解する	198
二、経絡学説の臨床応用	199
(一) 病理変化の解釈	199
(二) 疾病の診断と治療の指導	200
〔古典の参考文献〕	202

第五章 病 因

第一節 六淫と疫癘	209
一、六 淫	209
(一) 風 邪	211
(二) 寒 邪	213
(三) 暑 邪	215
(四) 湿 邪	216
(五) 燥 邪	219
(六) 火 邪	220
二、疫 癘	222
(一) 疫癘の基本的な概念	222
(二) 疫癘の致病の特徴	223
第二節 七情と飲食勞倦	223
一、七 情	223
(一) 七情と内臓気血との関係	224
(二) 七情の致病の特徴	225
二、飲食勞倦	226
(一) 飲 食	227
(二) 勞逸の損傷	229
第三節 痰飲と瘀血	231

一、痰 飲	231
(一) 痰飲の概念	231
(二) 痰飲の種類	231
(三) 痰飲の形成	232
(四) 痰飲の致病の特徴	233
二、瘀 血	234
(一) 瘀血の概念	234
(二) 瘀血の形成	234
(三) 瘀血の致病の特徴	235
(四) よく見られる瘀血症	236
第四節 外傷及び虫獣の傷	237

第六章 病 機

第一節 発病原理	238
一、邪正闘争と発病	239
(一) 正気の不足することは発病の内在的な根拠	239
(二) 邪気は発病の重要な条件	239
二、正気の強弱に影響する素因	240
(一) 体 質	240
(二) 精神状態	240
(三) 栄養と鍛煉	240
(四) 生活環境	241
第二節 病 機	241
一、邪正闘争	241
(一) 邪正闘争と虚实変化	242
(二) 邪正闘争と疾病の転帰	244
二、陰陽失調	247
(一) 陰陽の偏盛	247

(二) 陰陽の偏衰	249
(三) 陰陽の互損	250
(四) 陰陽格拒	250
(五) 陰陽亡失	251
三、気血の異常	253
(一) 気の異常	253
(二) 血の異常	256
(三) 気血の相互関係の異常	257
四、津液代謝の異常	259
(一) 津液の不足	259
(二) 津液の輸布と排泄の障害	260
(三) 津液と気血との関係の失調について	261
五、「五邪」が内より生じる	262
(一) 風気が内より動く	263
(二) 寒が内より生じる	264
(三) 湿濁が内より生じる	265
(四) 津傷で燥に化す	265
(五) 火熱が内より生じる	266
六、臓腑の病機	267
(一) 五臓の陰陽と気血の失調	268
(二) 六腑の機能の失調	281
(三) 奇恒の腑の機能の失調	284
〔古典の参考文献〕	286
第七章 予防と治療原則	
第一節 予 防	289
一、未病先防	289
(一) 体質を強め、抵抗力を高める	290
(二) 病邪の侵入するのを防ぐ	292
二、既病防変	292

(一) 早期診断	293
(二) 早期治療	293
第二節 治療原則	294
一、治病求本（病を治すときに、本を求ぬる）	295
(一) 正治と反治	296
(二) 治標と治本	299
二、扶正と祛邪	301
(一) 扶正と祛邪の概念及びその相互関係	301
(二) 扶正祛邪の応用	302
三、陰陽の調整	304
(一) 陰陽の偏盛の調整	304
(二) 陰陽の偏衰の調整	305
四、臓腑の機能の調節	307
五、気血の関係の調理	308
六、三因制宜	309
(一) 因時制宜	310
(二) 因地制宜	311
(三) 因人制宜	312

緒 論

緒論には主に中医基礎理論の研究対象、内容及びその位置について、中医基礎理論の形成、中医基礎理論の基本的な特徴等三つの内容がある。

一、中医基礎理論の研究対象、内容及びその位置について

(一) 中医基礎理論の研究対象

中医基礎理論は中医学に於て、人体の生理機能、疾病の発生と発展の規律及び予防と治療の原則等を研究する学科である。

人と疾病を研究対象とする科学は医学とよばれる。医学に於て、その発源地によって全世界に五種類の古代の民族医学があつて、即ち

1. ナイル川の流域を発源地とするエジプトの民族医学。
2. インダス川の流域を発源地とするインドの民族医学。
3. 両川の流域を発源地とするバビロンの民族医学。